

# 塩釜神社(宮城県塩竈市)

ここは塩釜神社の表参道(表坂)



東北鎮護鹽竈神社とある







## ジュール・ブリュネ (1838-1911)

幕府要請のフランス軍事顧問団の一員として慶応3年(1867)に来日。  
戊辰戦争で新政府を支持した駐日フランス公使を非難、榎本武揚  
ら徹底抗戦を唱える幕臣に共鳴し、旧幕府艦隊8隻と共に函館に逃れ  
る途中、浦戸寒風沢(塩竈市)に寄港したのは、明治元年旧暦8月26日  
(1868年新暦10月12日)であった。



©2004 C.マツダ

艦隊は修理や物資補給、新選組や会津藩士乗艦のため一ヶ月程停泊したが、その間ブリュネは、榎本に伴われて仙台藩主伊達慶邦に面会、主戦派の軍議に出席したり、南境の戦線視察をしながら仙台周辺を歩き回り、刻明なスケッチを何枚か残している。

外国人による本市を描いた最も古い作品となる「鹽竈神社表参道」のスケッチは、一行が鹽竈神社を参拝した後に、融ヶ丘(塩竈公園)の中腹から描いたものと思われ、画面左下の「日の丸」の旗は、明治改元(1868年新暦9月8日)に関連したものと推測される。

(※原画には日付、場所、説明の記載なし)

なおブリュネは、明治2年旧暦5月1日(1869年新暦6月10日)、五稜郭落城直前にフランス軍艦に逃れ、本国に連れ戻される。

パリで軍事裁判にかけられるが、軽い処罰で許され、後に陸軍参謀総長まで昇進した。

### スケッチの行方と発見

ブリュネの作品は未発表のまま本国に持ち去られたが、日仏交流史の研究者であるクリスチャン・ボラック氏が十年がかりでブリュネの子孫を探し出した。

またボラック氏は、1988年に孫のアンドレの末亡人カトリースさんを函館に招き、榎本武揚の子孫と対面させ、作品を遺立函館美術館で公開した。

なおその機会に、かねてよりブリュネ研究を支援してきた中央公論社 社長 嶋中鶴二氏により、「フランス士官 ブリュネのスケッチ100枚」がムックとして刊行された。

この時、函館を訪れていた本市文化財保護委員である小川澄夫氏が、偶然スケッチ集に気づき、美術館を訪れて「お寺の階段」と題したこのスケッチが、鹽竈神社表板の風景であることを確認し、マスコミを通して広く紹介話題となった。

ブリュネの尊業と関係者の努力を讃えと共に、日仏交流、本市の貴重な郷土資料として、このスケッチを展示するものである。

2004年8月26日 塩竈市

さて、このキツイ階段を登ろう



隨身門



ここから登る







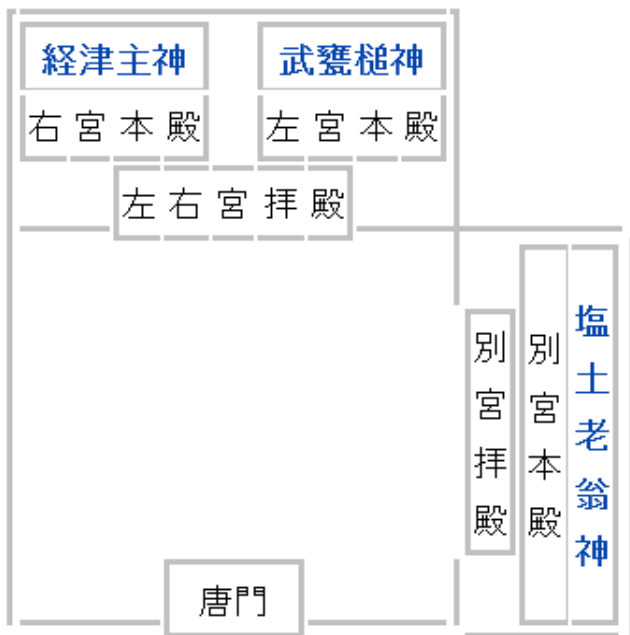
正面は唐門



唐門を入ると左右宮拝殿であるが、この様に修復中であった



鹽竈神社の別宮(主祭神)と左右宮の位置関係



ウィキペディアより

社殿はいずれも重要文化財となっている

こちらはその右手の別宮拝殿/重要文化財



唐門を出て東神門へ進むと舞殿がある



舞殿から唐門方向を振り返って見る



東神門を外から見る





右手は七曲坂



## 七曲坂

ななまがしり

七曲坂は、鹽竈神社参道（表坂・七曲坂・裏坂）の中で

最も古く、その形成は、神社の創建と同時期の奈良時代頃と推測されている。

往時（古代・中世）は、国府・多賀城から香津（国府津—

古代市街地／第一小学校周辺）へ至る東海道を鳥居原（古

代の市場／塩釜高校校庭）で江尻へ下り、入江となって

いた祓川を舟（鎌倉時代に架橋「御臺の橋」）で渡って当

坂へ至る道筋であった。

さらに上野原（古代の野菜採取場）や利府春日、松島

方面へ通じる重要な生活道路ともなっていた。

なお、当坂下の四方石辺りは、作道時の排出土砂を用

いて海面を埋め立て造成されたもので、神社創設以来の

神官阿部家が江戸時代初期まで約一千年間屋敷を構え参

道口を守っていたと伝えられている。

享保一六年（西暦一七三一年）から近年まで、祭礼の

ときには御輿の帰る道筋となっていた。

塩竈市教育委員会

さて、ここは鹽竈神社博物館





東参道(裏坂)を下りる



こんな五重石灯籠もあった



下りてきた所は東参道(裏坂)の登り口



遠景から





御釜神社

こちらは鹽竈神社末社の御釜神社



# 御釜神社 (鹽竈神社末社)

祭神 鹽土老翁神  
月次祭 毎月六日

特殊神事

藻 川 七月四日

御水 替 七月五日

藻塩焼例祭 七月六日

藤鞭社祭典 七月七日

## 由緒

鹽竈市名発祥の地  
日本製塩起源の地

恭しく顧みるに、神代の昔武甕槌、経津主の二神鹽土老翁神の教導によつて東北経営の功を畢へられたが、鹽土老翁神はこの地に留り給ふて人々に海草を焼き製塩の法を教へ給ふたので其の神恩に感謝して三神を斎き奉り鹽竈神社を創祀するに至つたと云ふ。當御釜神社は鹽竈神社の末社に坐し、鹽土老翁神製塩の旧址で境内の牛石、藤鞭社等何れもこれに有縁のものと伝へられ例年七月四日藻川、五日水替、六日藻塩焼、七日藤鞭社と古式床しい特殊神事を経て製せられた神塩を以て日本社例祭の神饌を調進する慣例である。蓋し鹽竈の地名は鹽土老翁神製塩の伝説に由来し、元禄二年五月八日芭蕉は御釜神社に詣、「未ク尅、塩竈二着、(中略)出初二塩竈ノかまヲ見ル云々」とあり、神竈を拝し古来製塩の由来に思いを馳せ、鹽土老翁神の偉大さに賛仰のことばを惜しまなかつたのである。(曾良旅日記より)更に此処は市名発祥の聖地で実に本邦製塩の濫をなす記念すべき所である。

社務所





参考ホームページ

<http://www.shiogamainia.jp/>

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A1%A9%E9%87%9C%E7%A5%9E%E7%A4%BE>

<http://www.miyatabi.net/miya/siogama/siogamain.html>





護鹽竈神社ホームページより